

經濟論叢

第124卷 第5・6号

河上 肇生誕100年記念号

福田徳三と河上 肇	杉 原 四 郎	1
初期河上における経済政策論	大 野 英 二	21
河上 肇の「国家論」小考	住 谷 一 彦	50
漢詩人河上 肇の旧蔵書	一 海 知 義	65
河上 肇と「加算と減算」	高 寺 貞 男	87
『改版社会問題管見』序文	山 之 内 靖	99
財政問題よりみた河上 肇「貧乏物語」	池 上 惇	104
河上 肇における科学と宗教と哲学	古 田 光	120
資 料		
京都大学時代の河上 肇	細 川 元 雄	141

経 済 学 会 記 事

経済論叢 第123巻・第124巻 総目録

昭和54年11・12月

京 都 大 学 経 済 学 會

《資 料》

京都大学時代の河上 肇

細 川 元 雄

は じ め に

河上肇の年譜および著作目録は、すでに「記憶に基づく自記*」をはじめ、天野敬太郎氏、内田丈夫氏等の労作**によつて、彼の全生涯を概括するうえに、今日あらためて作成することはないと思われる。しかしながら河上の思想遍歴を尋ねるうえには、さらに詳細な年譜が必要である。とくに河上の学問的業績を育んだ京都大学在職中（1908—1928）のことは重要である。ここで、当時京都大学において、河上が就いた役職、開講した科目、講演、参加した研究会などを年代順に追ってみた***。

なお、本稿は、1979年10月20日河上肇記念会、東京河上会と本学会との共催による「河上肇生誕100年記念講演会」に、本学会評議員長高寺貞男教授の依頼により調査したものであり、当日そのうち講義科目を一覧表に纏め、聴講者に配布し、高寺教授の「開会の挨拶」に加えられたものである。調査に当って、経済学部関覧掛林茂栄氏、同庶務掛中川好昭氏、同教務掛鈴木茂氏に協力を得たことに謝意を表します。

河上肇年譜（京大時代）

1908（明治41）年

8月24日 「京都帝国大学法科大学講師を嘱託す」（京都大学経済学部保管庶務文書）

* 河上肇著『経済学大綱』改造社、1928年刊、巻末の年譜、著述目録参照。

** 天野敬太郎「河上肇著作目録（経済学の部）、同（随想の部）」『河上肇著作集』第2、10巻所収、内田丈夫「河上肇年譜」『河上肇著作集』第7巻所収、最新のものとして、杉原四郎、一海知義「河上肇」（新評論1979年10月）の「文献解題」、「河上肇年譜」を参照。

*** この時期、河上が「講師嘱託」として出向した立命館大学（1908—1922年）、同志社大学（1918—1920年）、大阪高等商業学校（1909—1913年）、1912年講義ノートとして残っている関西学院等において開講した科目、また他大学、専門学校、実業界等における講演がここでは脱落している。これらを加えることは今後の課題としたい。

（凡例：1）出典は各項のあとに括弧で示した。2）本文および注記の引用文は、原文が片仮名の場合は平仮名になおし、新漢字を用いた。）

—以下『履歴』と略称する)

9月～1909年6月 講義科目「経済史」を担当¹⁾、なお経済演習担当²⁾は不明

10月18日 京都法学会大会における講演「経済の研究に於ける 表と裏³⁾」(『京都法学会雑誌』第3巻第11号および『以文会誌』第1号—以下前者を『雑誌』、後者を『会誌』と略称する)

11月6～7日 経済演習科学生と阪神見学旅行⁴⁾(『雑誌』第4巻第1号、『会誌』第1号)

12月18日 「学術研究の爲め出京を命ず⁵⁾」(『履歴』)

1909 (明治42) 年

7月29日 「任京都帝国大学法科大学助教授」(『履歴』)

7月31日 「学術実施研究の爲め香川、高知、徳島の三県へ出張を命ず⁶⁾」(『履歴』)

9月～1910年6月 講義科目「経済史」、「政治学⁷⁾」を担当(河上文庫保管『講義ノート』—以下『ノート』と略称する)

11月6～7日 経済演習科学生と滋賀県水産事業視察⁸⁾(『雑誌』第5巻第1号、『会誌』第1号)

11月17～18日 政治学科2回生と阪神見学旅行⁹⁾(『会誌』第2号)

1910 (明治43) 年

9月～1911年6月 講義科目「経済史¹⁰⁾」、「政治学¹¹⁾」、「経済学史」を担当(『ノート』)

1911 (明治44) 年

3月18日 「学術実施研究の爲め沖縄県下へ出張を命ず¹²⁾」(『履歴』)

4月29日 法律経済学研究会講演会における講演「琉球研究の興味¹³⁾」(『雑誌』第6巻第6号)

7月13日 「法科大学卒業生滝正雄¹⁴⁾『分配の理論及政策』研究の爲め大学院入学に付指導教授を命ず」(『履歴』)

9月～1912年6月 講義科目「経済史¹⁵⁾」、「経済学史」および経済演習(原論英書講読)を担当(経済史は『ノート』あり、『会誌』第4号)

1912 (明治45・大正元年)

6月20日 「本年施行すべき本学法科大学入学試験委員を囑託す」(『履歴』)

8月5～10日 京都帝国大学第3回講演会における講演「価値論(10時間)」(『会誌』

第6号、のち『経済原論』として大正2年11月に刊行)

9月～1913年6月 講義科目「経済史」、「経済学史」¹⁶⁾を担当(経済学史は『ノート』あり)

1913(大正2)年

5月4日 第7回経済学読書会¹⁷⁾における報告「物価騰貴の原因としての信用の膨張」(『雑誌』第8巻第6号)

6月8日 第9回経済学読書会における報告「Fisher氏の貨幣数量説に対する批評」(『雑誌』第8巻第8号)

9月12日 「経済史及経済学史研究の爲め滿二ヶ年間独国、仏国、伊国、英国及米国へ留学を命ず」(『履歴』)

10月12日 河上留学のための送別会として第10回経済学読書会開かれる(『雑誌』第8巻第11号)

10月24日 留学のため「京都出発」、同月25日「神戸出帆」(『履歴』)

1914(大正3)年

10月 「法学博士の学位を授く」(『履歴』)とあるが、『雑誌』第9巻第12号「記事」には「河上助教授は博士会の推薦に依り十一月十日を以て法学博士の学位を授与せられたり」とある。

1915(大正4)年

2月26日 留学¹⁸⁾より「帰朝」(『履歴』)

3月16日 「任京都帝国大学法科大学教授」、同日「経済学第四講座担当を命ず」(『履歴』)

3～6月 講義「経済史」、「経済学史」¹⁹⁾を担当(『ノート』および法科大学『成績表』大正4年)

5月16日 経済学読書会における報告「人種問題」²⁰⁾(『雑誌』第10巻第6号)

9月～1916年6月 講義科目「経済政策(貨幣及交通経済)」、「経済学史」および経済演習(論題1. 貨幣の購買力の研究。2. 収益遞減の法則)を担当(『会誌』第13号²¹⁾、『成績表』大正5年。『ノート』は「貨幣及交通経済」のみ)

9月23日 「中川幹太『経済学』研究の爲め大学院入学に付指導教授を命ず」(『履歴』)

11月5日 学友会談話部における談話²²⁾ (『会誌』第14号)

1916 (大正5) 年

2月5日 学友会親和部大茶話会における講演「余の経済的国家主義」(講演内容とも『会誌』第15号)

2月13日 京都法学会主催「マルサス生誕百五十年記念講演会」における講演「人口論梗概²³⁾」(『経済論叢』第2巻第5号)

8月16日 「本学法科大学公用図書主任を命ず」(1917年9月25日まで, 『履歴』)

8月17日 「本学法科大学入学試験委員を嘱託す」(『履歴』)

9月～1917年6月 講義科目「経済原論上の特殊問題(分配論)」を担当(『ノート』)²⁴⁾

10月14日 「本学図書館商議会委員を命ず」(1917年9月25日まで, 『履歴』)

1917 (大正6) 年

7月13日 「石川興二²⁵⁾『経済学分配論』研究の爲め大学院入学に付指導教授を命ず」(『履歴』)

同月同日 「近衛文唐²⁶⁾『国家学』研究の爲め大学院入学に付指導教授を命ず」(『履歴』)

9月～1918年6月 講義科目「経済原論上の特殊問題(分配論)」(『ノート』), 「経済学史」(『成績表』大正7年)および経済演習(論題1. 自由研究, 2. 自己に於いて問題を決し得ざる者は指定せられたるフィッシャー及テローア氏の著書に示された多数小問題を逐一解釈するを以て課題とす)を担当(『会誌』第20号)

1918 (大正7) 年

4月23日 「本学法科大学入学試験委員を嘱託す」(『履歴』)

8月6日 第9回夏期講演会の「科外講演」を担当, 「マルクスの社会主義²⁷⁾」(『会誌』第28号)

9月～1919年6月 講義科目「経済原論上の特殊問題(分配論)」(『ノート』)「経済学史」(『成績表』大正8年)および経済演習(論題, 社会主義に関する討究)を担当(『会誌』第23号)

10月27日 学友会演説部「東西両京帝国大学聯合演説会」において講演「病中所感²⁸⁾」(『会誌』第23号)

11月20日 (学友会談話部?) 講話「思索の必要と研究の態度²⁹⁾」(『社会問題研究』)

第1冊)

1919 (大正8) 年

5月29日 (経済学部創設にともない)「経済学部勤務を命ず, 経済学第四講座担任を命ず」(『履歴』)

同月同日 「京都帝国大学評議員を命ず」(1920年10月18日まで, 『履歴』)

6月4日 「経済学部公用図書主任を命ず, 本学附属図書館商議委員会を命ず」(1920年4月1日まで, 『履歴』)

8月31日 「経済学部入学試験委員を嘱託す」(『履歴』)

9月～1920年6月 講義科目「経済原論第1部³⁰⁾」, 「英経済書講読」を担当(『成績表』大正9年, 『会誌』第24号)

この年, 「共産党宣言」講読会³¹⁾

1920 (大正9) 年

4月9日 「法学部入学試験委員を嘱託す」(『履歴』)

9月～1921年3月³²⁾ 講義科目「経済学史³³⁾」, 「経済原論第1部³⁴⁾」を担当(『成績表』大正10年)

1921 (大正10) 年

4月～1922年3月 講義科目「経済原論第1部」, 「英経済書講読」を担当(『成績表』大正11年および経済学部教務掛保管「授業割当表」一以下『表』と略称する, 原論は『ノート』あり)

4月22日 「貴島憲大学院入学に付経済学史研究の指導教授を命ず」(『履歴』)

(5月29日 京都帝国大学経済学会第3回公開講演会における講演³⁵⁾)

1922 (大正11) 年

4月～1923年3月 講義科目「経済学史」, 「経済原論第2部(6月まで経過的)」, 「英経済書講読」を担当(『表』, 学史は『ノート』あり)

6月5日 学友会講演部主催「名士招待講演会(大山郁夫, 長谷川如是閑)」における挨拶「我等社及び同人長谷川, 大山二氏に就て」(『会誌』第27号)

10月14日 学友会講演部主催「名士招待講演会(福田徳三)」における挨拶(『会誌』第27号)

10月26日 学友会講演部主催「有島武郎氏講演会」における挨拶(『会誌』第27号)

1923 (大正12) 年

4月～1924年3月 講義科目「経済原論³⁶⁾」を担当(『表』および『ノート』)

6月5日 京都帝国大学経済学会主催「アダム・スミス生誕二百年記念講演会³⁷⁾」における講演「スミスの著作」(『経済論叢』第17巻第1号³⁸⁾)

8月1～7日 第14回夏期講演会における講演「マルクス資本論大意」(『会誌』第28号, 『社会問題研究』第47冊に記事, 講演ノートは河上文庫にあり)

1924 (大正13) 年

4月1日 「補京都帝国大学経済学部長」(同年5月1日依願免, 『履歴』)

4月～1925年3月 講義科目「経済学史」, 「英経済書講読」, 法学部, 農学部において「経済原論³⁹⁾」を担当(『表』および『京都帝国大学一覽』, 学史, 原論は『ノート』あり)

1925 (大正14) 年

4月～1926年3月 講義科目「経済原論⁴⁰⁾」を担当(『表』および『ノート』)

4月29日? 京大社会科学研究会研究部「資本論」研究班において講義⁴¹⁾(『京大社会科学研究会会報』第4号)

5月1日 「京都帝国大学評議員を命ず」(1928年4月18日退職するまで, 『履歴』)

12月24日 いわゆる「京大学生事件」に対し, 経済学部教授有志(神戸正雄, 財部静治, 河上肇, 河田嗣郎, 本庄栄治郎, 小島昌太郎)に加わり「意見書⁴²⁾」を発表する。

1926 (大正15・昭和元) 年

1月15日 「学連事件」のため 家宅搜索を受ける⁴³⁾(『京都帝国大学新聞』第30号—以下『新聞』と略称する)

1月16日 京大社会科学研究会主催「カール・リープクネヒト及びローザ・ルクセンブルグ追悼記念講演会」における講演予定「ローザ・ルクセンブルグの資本蓄積論⁴⁴⁾」(『新聞』第16号)

4月～1927年3月 講義科目「経済学史」, 「経済演習」⁴⁵⁾を担当(『表』, 学史は『ノート』あり)

この頃(3～4月?) 京大社会科学研究会の指導教授となる⁴⁶⁾。

4月22日 京大社会科学研究会講演会における講演「対立物の統一としての商品」

(『社会問題研究』第71冊)

4月24日 京大社会科学研究会春季大会における祝辞(『新聞』第22号)

5月6日 京大社会科学研究会主催「マルクス誕生記念展覧会および講演会」における講演「二、三の出品物に就いて⁴⁷⁾」(『新聞』第23号)

10月14日 京大社会科学研究会秋期大会に指導教官として出席(『新聞』第36号)

12月10日 経済学批判会第1回学内講演会における講演「会の中に就いて⁴⁸⁾」(『新聞』第41号)

1927(昭和2)年

2月11日 経済学批判会週研究会における報告⁴⁹⁾(『新聞』第45号)

4月～1928年3月 講義科目「経済原論⁵⁰⁾」を担当(『表』、『ノート』)

6月28日 経済学批判会大講演会における講演者三木清(当時法政大学教授)を紹介(『新聞』第56号)

10月14日 京大社会科学研究会秋季大会に指導教官として出席(『新聞』第59号)

10月14日 京大社会科学研究会主催の社会科学講演会における講演者森戸辰男を紹介(『新聞』第61号)

10月15日 経済学批判会における報告「土方氏の『マルクス価値論の排撃』の批判⁵¹⁾」(『新聞』第61号)

12月15日 経済学批判会および学友会講演部の招へい者大山郁夫を経済批判会において「歓迎の辞」(『新聞』第67号)

1928(昭和3)年

1月21日 京大社会科学研究会「レーニン」記念講演会(内藤赴夫「マルクス・エンゲルス研究所に就いて」他)、河上の出席は不明(『新聞』第69号)

1月24日 経済学批判会特別講演会(三木清「ヘーゲルとマルクス」)に出席(『新聞』第69号)

4月18日 「依願免本官」(『履歴』)

4月21日 『新聞』第74号に「大学を辞するに臨みて」を发表

5月12日 学生有志主催「河上博士送別謝恩会」(『新聞』第77号⁵²⁾)

6月11日 経済学部同好会主催「河上博士送別謝恩会」(『新聞』第80号)

注 記

- 1) 1909年5、6月施行の試験問題は『京都法学会雑誌』（以下『雑誌』と略称する）第4巻第8号に公表されているが、出題教官名がない。河上が担当したであろう経済史の出題をみると、5月の分は「経済社会の発展を論ぜよ」、6月の分は「1. 生産、交易、分配、消費、資本及び価値の発展を關係的に論ぜよ。2. 物質的史観説を評論せよ。3. 産業革命を論ぜよ」である。出題の内容から河上のものと思われる。しかし現在確認できる大学での資料がないが、『河上肇より樺田民藏への手紙』には、二人の出会いが河上の第1日目の講義のあとであると河上自から書き、新版編者の大島清氏が樺田が「河上講師の経済史を聴講し、これを専攻科目とした」と書かれている。
- 2) 経済演習は、(a)当時法科大学の「各科担任の教授共同して之に当り、学生を指導するの制」度であり、規程（1907年7月の改革規程）によれば、「第4条 各学科講義の外演習科を置く。演習科を置くべき科目及其方法は教授会に於て之を定む」となっている。当時国法演習科、私法演習科、刑法演習科、民事訴訟法演習科とともに経済演習科が開かれ、『雑誌』第1巻には演習問題が開科以来さかのぼって掲載されている。なお経済演習科論題は1901～1904年度がここに載せられている。(b) 経済演習科の1907年度の開科状況の一端は、「経済演習科記事」（『雑誌』第2巻第10号123～126ページ）にうかがえる。また後年小川郷太郎「経済法律演習論」（『雑誌』第8巻第9号）によってその意義が論じられている。1919年5月経済学部が創立された段階も演習は「講義外」とされ、1925年度にはじめて講義科目（正科目、副科目のうち副科目）となり、そのご1938年度に至って必修科目となった。(c) 河上の経済演習担当は海外留学期間（1913～1914年度）を除いて在職中は毎年度開かれたと推定されるが、以下、本文で明記した1911、1915、1917、1919、1926年度以外は不明である。
- 3) 京都法学会は、京都帝国大学法科大学の教官、学生、卒業生より、1906年1月に創立、雑誌の発行、年一度の大会、隔月の例会を開くといった今日各大学内に置かれている学会である。この大会は河上の赴任講演に相当し、その講演要旨は次の通り記録されている。「……新任講師河上肇氏登壇「経済の研究に於ける表と裏」なる論題下に時に軽快なる諧謔を交へ満場を哄笑せしめつつ精細なる数字と興味ある例証の下に諄々として其論歩を進められたり。而して論題は（イ）経済界に於ける表と裏（ロ）宇宙間に於ける表と裏との二点に分ち、其結論に曰く、凡て事物は無差別平等なると同時に、亦千差万別揃一する所なし、極端なる差別観が真理たると同時に、極端なる平等観も亦真理たるを失はず。要するに総ての事物は其觀察点を異にするに従ひ、或は無差別平等たるべく、或は千差万別たるべし。故に學術上事

物を観察するに当りては先づ一定の標準を定め、之を立脚地となさざるべからず。然らざれば凡ての研究は漫然捕捉する所なきに終らんのみ、天地間の現象は限りなき矛盾より成立すると同時に、限りなき調和より成立す。是吾人が事物の研究に当りて最も注意を要すべき点なり。」(『雑誌』第3巻第11号175ページ)

- 4) 田島錦治、神戸正雄法科大学教授と内田銀蔵文科大学教授と共に河上は同行した。見学先などの詳細は同誌に記されているが、河上個人の当時の印象記を『日本経済新誌』『読書余録(3)阪神遊記』(第4巻第5号、1908年12月3日刊)に書いている。
- 5) 『履歴』による、「出京」命令は、翌年(1909年)の12月16日と1910年11月1日と1911年7月22日と4回のみが記されているだけである。この年の12月20～22日東京高等商業学校で開催された社会政策学会第2回大会に河上は出席し、「農業保護策としての外米課税」を報告している。出京命令のある次の年も慶応義塾大学で開かれた第3回大会に出席、「経済社会終極的理想」という論題で報告している。1910年および1911年の出京目的が何かは不明であるが、河上が上記のほか社会政策学会出席のため出張したのは、1911年10月1日第1回地方講演会で神戸高等商業学校に行き、「社会政策の哲学」を報告、次に1912年10月19～20日第6回大会で専修学校に行き、「共同生活と寄生生活」を報告、1916年10月29～30日第10回大会(於慶応義塾大学)に出席、さらに1917年12月21～23日第11回大会(於専修大学)に出席、「未決監」を報告する。(資料:『社会政策学会論叢』各冊および『社会政策学会史料集成別巻1』、御茶の水書房 1978年2月刊)
- 6) 四国への出張は、「四国遊記」として『日本経済新誌』(第6巻第3号 1909年11月3日刊)にその印象記を書いている。
- 7) この学年終了の6月施行試験問題は、「政治学(河上助教授出題)」、1. 政治現象の本質。2. 政治と宗教と経済との関係。3. 無政府主義及び之が取締。」であった(『雑誌』第5巻第8号、151ページ)
- 8) 田島、神戸両教授と財部静治、河田嗣郎と河上の三助教授が同行している。『雑誌』には「押川」(参加学生?)によって詳しい報告が載せられている。
- 9) 神戸教授と河田、河上の二助教授が同行した。
- 10) この学年終了の6月施行試験問題は、「経済史(河上助教授)」、1. 経済的史観の何物たるやを説明して其の弱点を評論すべし。2. 機械の発達が労働者階級に及ぼせし影響如何。3. 左の諸問に答ふべし。(i)労働歌の起因如何、(ii)牧畜の起源如何、(iii)Manor とは何ぞや、(iv) Craft gild とは何ぞや」であった(『雑誌』第6巻第8号 153ページ)
- 11) 現存『ノート』は、表紙題が「社会主義論 明治44年春4月」、背に「社会主義講義44年」と書かれたものである。
- 12) 沖縄出張は、『履歴』では同年3月31日に出張旅費の追給が記されている。出張

前と出張中のノートが3冊河上文庫に残っている。またこのときの成果は「琉球系満の個人主義的家族」(『雑誌』第6巻第9号)と「琉球地割制度の一端」(『和田恒教授在職二十五年記念経済論叢』)に結実している。なおこの際起った河上の舌禍事件、沖縄学創設者伊波普猷との交流など、比嘉春潮『沖縄の歳月』(中央公論社)、金城正篤、高良倉吉『伊波普猷』(清水書院)、住谷一彦『河上肇の思想』(未来社)を参照。

- 13) 法律学経済学研究会は法科大学学生によって組織されているもので、河上の講演は先の沖縄旅行中の見聞録である。講演会記事によれば、「其の一段は琉球人の忠君愛国思想に関する観察にして、『愛国心は羅馬を距るほど強し』の古語を引きて、其の表面及裏面の観察を述べられ、更に第二段に於ては糸満村に於ける経済上の個人主義を紹介せられ、要するに以上は琉球研究の興味ある所以を、一は政治上の現象に就き二は経済上の現象に就いて例示したるに過ぎざれども、吾々が只だ想像し居るよりも遙に優りて琉球の研究は興味ありと結ばれたり」と記されている。
- 14) 滝正雄は、のち法科大学講師、1917年4月に愛知県から衆議院議員に当選。外務政務次官、法制局長官等歴任後貴族院議員となる。立候補の際、河上は応援演説をした。『大阪朝日新聞』に掲載した「イエス乎ノー乎一総選挙に際して」(のち「真実の言葉」『社会問題管見 改版』に収録)はその演説草稿である。
- 15) この学年終了の6月施行試験問題は、「経済史(河上助教授出題) 1. 歴史に法則ありや。2. 唯物史観を評論すべし。3. 人類と人類以外の動物との経済上の差異如何。4. 経済発展の根本動力如何。以上四題中二題を選択すべし」であった(『雑誌』第7巻第8号158ページ)。
- 16) この学年終了の5月施行試験問題は、「経済史(河上助教授出題) 千八百七十四、五年以降二十年間に亘る世界金本位国の物価下落の主要原因及び同期間に於ける日本物価騰貴の主要原因」、6月施行試験問題は、「経済史(河上助教授出題) 1. 明治十年以降我国に於いて諸物価が急激なる騰貴を為せし主たる原因及び同期間に於て薪炭類の価格の却て下落したる原因如何、又た明治十四年四月には一円銀貨の相場約一円八十銭に上りしと言へるが當時に於ける 価値の本位は何なりしや。2. 世界金本位国に於ける物価の趨勢が一八九六、七年代を以て其の傾向を一変するに至りたる主たる原因及び我国物価の変動が之と趣を異にせし主たる原因如何。」
「経済学史(河上助教授出題) 1. アダム・スミスは価値を如何に分類し、価値と労働との関係に就き如何なる意見を有せしや。2. リカードは価値と労働との関係に就き如何なる意見を有せしや。3. 三浦梅園の価原に就いて知る所を記すべし。4. マルサス人口論の初版に於ける所論の要及び其の再版以後に於ける変化の主なる点を述べべし。5. マルサス人口論に対し従米行はれたる非難の主なるものを述べべし。6. 我国徳川時代の学者は人口の増加に就き略ぼ如何なる考を有せしや。

右の中第1問と第2問、及び第4問と第5問とは何れか一を選んで答ふべし」とであった。(『雑誌』第8巻第7号231ページ、第8巻第8号255ページ)

- 17) 経済学読書会は、法科大学および文科大学教官を主体とし、学外教官、実業界等の専門家の参加した研究会である。『雑誌』の記事によれば、1912年11月30日に第1回が開催され、1915年5月16日第19回に相当する研究会記事で終っている。その後『経済論叢』をみてみると、同年9月19日、11月28日、1916年1月21日に開かれ、記事としては『経済論叢』第2巻第4号に「福田(徳三)博士の入洛を機として2月16日午後5時より経済学読書会を学生集会所に開く」とあり、当日の福田の講演「英国の相続法」は高田保馬によって要旨が掲載されている。そのご経済学部となって経済学会の例会として長く続けられたと思われるが、記録はない。しかし研究会の中心的な存在の一人であった戸田海市が1924年3月に亡くなったとき、福田徳三は、追悼文に当時の「京大経済学部は、実に経済学者のパラダイスであった。其の経済学研究会では、火の出るような討論が闘わされつつ、個人的に親睦は実に理想的であった」また「会の討論では伏兵各所から起って、厚顔な私も慚からず面喰ひはしたが、然し自分が可なり永い間考へて居た問題に就いて、思いも設けぬ突っ込んだ質問を受けたことは、会心此上もないことであった」(『経済論叢』第18巻第4号146ページ)と述べている。この会によって、「京都経済学」の学風が培われたのである。初期には西田幾多郎も参加していたことは興味深い。以下に開催年月日、報告者、報告論題を掲げ、参考のため出席者の一覧表を作成した(なお『雑誌』掲載の1～19回に限った)。

- 第1回1912年11月30日 高田保馬「Soda, Die logische Natur der Wirtschaftsgesetze」
 第2回1912年12月15日 西田幾多郎「認識論に関するリッケルトの説」
 第3回1913年2月14日 田島錦治「旅行談」、小川郷太郎「唯物史観の反対説に対するロリア氏の弁駁」
 第4回1913年3月9日 神戸正雄「貨幣論」
 第5回1913年3月16日 米田庄太郎「ロオリアの進化論観」
 第6回1913年4月20日 山本美越乃「水産資本に就いて」
 第7回1913年5月4日 河上 肇「物価騰貴の原因としての信用の膨張」
 第8回1913年5月24日 浮田和民「日米問題」
 第9回1913年6月8日 河上 肇「Fisher氏の貨幣数量説に対する批評」
 第10回1913年10月12日 戸田海市「世界の金産額と物価との関係」
 第11回1913年11月16日 神戸正雄「国富統計」
 第12回1913年12月14日 本庄栄治郎「西陣織の値入取引」、石坂音四郎「頼母子講」

- 〔第13回〕 1914年5月3日 高田保馬「社会法則の性質」
〔第14回〕 1914年6月21日 内藤虎次郎「支那銀貨の沿革」
〔第15回〕 1914年9月19日 米田庄太郎「戦争に就きて」
〔第16回〕 1914年12月13日 戸田海市「米価暴落の応急策」
〔第17回〕 1915年1月31日 小川郷太郎「蚕糸業に就きて」
〔第18回〕 1915年3月7日 神戸正雄「研究所に就いて」
〔第19回〕 1915年5月16日 河上 肇「人種問題」

(なお、『雑誌』には第6回以降滝正雄による詳しい報告記事がそのつと掲載されている)

- 18) 河上の留学の見聞記として、『祖国を顧みて』(実業之日本社, 1915年刊; 河上肇著作集第9巻, 筑摩書房) 参照。
- 19) 河上留学中, 経済史の講義は小川郷太郎が, 経済学史は田島錦治が担当し, 帰朝後学年終了まで両講義を引き継いで分担している。『成績表』によると両科目とも50点満点とし, 経済史は小川(50点満点)と河上(50点満点)との合計点, 経済学史は田島と河上との合計点が各人の成績となっている。
- 20) 報告要旨が滝正雄によって『雑誌』に2段小活字, 2ページにわたり詳しく記録されている。その主旨は河上の著書『祖国を顧みて』の第2篇「日本民族の血と手」に相当する。
- 21) 京都帝国大学以文会は学生および卒業生有志を正会員, 教官を特別会員とした団体であり, 各種のスポーツ, 文化サークルをもつもので, 1913年に「学友会」と改称し, 機関紙たる『以文会誌』も『学友会誌』と改題した。『会誌』は1924年12月刊行の第30号で終り, 学友会新聞部の発行する『京都帝国大学新聞』に機関紙としての役割を引継いでいる。
- 22) 「談話部報」には, 第1回の臨時会を午後7時過ぎに開き, 「我等が修学上, 其他一切生活上の態度につき」講話をしたことが記され, その要旨を掲げ, 「博士は, その山口高等学校時代より大学を経て今日に至る迄の博士の深刻なる内的生活の歴史を述べられた, 右の博士の確信をば例証せられ, 吾等が強固なる人生観を得て自己の生活に安住し得る迄に如何に大なる修養と努力との必要なるかを暗示せられた。動もすれば浮薄又妥協的ならむとするわれ等が生活に対して, 大なる反省の機を与へられた」と結んでいる。のち「大正4年11月の或夜二三十名の大学生の集りの前にて述べたる談話」として論題「徹底」『中央公論』誌(第31年第1号, 1916年1月)に発表した。
- 23) 『経済論叢』マルサス記念号には, 河上の講演内容も掲載され, 河上によるマルサス書目および記念会記事が収録されている。
- 24) この学年の河上講義科目は, 分配論のほか経済学史, 外国(英)経済書講読, 経

講演が分担されていると思われるが、確認できる資料がない。

- 25) 石川興二は、のち京都帝国大学教授となる。1927年度以後河上のあとを継いで経済学史の講義を担当する。
- 26) 近衛文麿は、のち内閣総理大臣となる。河上は『自叙伝』の「思ひ出・断片の一部教師としての自画像」に近衛のことにふれている。なお、河上を指導教授とする大学院学生は、京大庶務課『学報』および現存の古い『名簿』1927年5月によると1921—27年入学で田島・河上を指導教授とする大学院生は24名となっている。
- 27) この講演はのち河上の個人雑誌『社会問題研究』に「マルクスの社会主義の理論体系(1〜7)」として連載された(第1〜3, 6〜8, 10冊)。
- 28) 演説会記事には講演題目と講演者名があるのみ、内容は不明である。
- 29) 『社会問題研究』の創刊号に載せられたものであり、最初に「大正7年11月20日或会合の席上、数名の学生の前にて、学問の研究に関し卑見の一斑を述べんが為め、朗読したる原稿の一部」とある。
- 30) 経済学部創設時から講義科目経済原論は第1学年配当の第1部と第2学年配当の第2部とからなっていたが、1922年からは2部制がなくなり、1科目となる。『会誌』は学部講義を紹介し、とくに第1学年必修科目の河上担当の経済原論第1部について、「河上教授が原論第1部の講義をされるのは今年が初めてである。今日迄の講義の項目を挙げれば次の通り
 第1編 生産及労働：経済学と富。労働。分業及協力。道具及機械。比例の法則。生産力と社会組織。
 第2編 交換及価値：需要供給の法則。享楽財に対する需要。生産財に対する需要。供給と必要価格。競争と生産費。
 第3編 貨幣及物価：貨幣の性質及其作用。」と記している。なお松方三郎「大正八・九年頃の河上先生」『回想の河上肇』をも参照。
- 31) 恒藤恭「京大時代の河上先生」(河上肇著作集月報1)によると「この年(大正8年)は従来の法科大学が廃止されて、法学部および経済学部が出現した年であるが、当時法学部の学生であった牧健二氏、故水谷長三郎氏などが首唱して約20人ばかりの学生のグループがつくられ、経済学部の河上教授にお願いして、『共産党宣言』を講読してもらったので、私もそれに参加した。こんにゃく版で紫色に印刷されたドイツ文のテキストをもちい、文学部史学科の教室で講読がおこなわれた」と述べられている。伊藤祐之の「その頃を顧みて」によれば石川興二、榎田民蔵も参加し、会の名を「労学会」と名づけ、小川郷太郎の抗議により社会問題研究会と改称したことが述べられている。また『河上肇より榎田民蔵への手紙』の「思ひ出(一)」に河上自から「講義をして居た」と述べている。なお河上文庫(寄託)にこの「こんにゃく版で紫色に印刷された」Manifest der kommunistische Partie があ

る。また松方三郎(当時学生)の『大正八・九年頃の河上先生』(前掲書)によると、同じ頃にブーデューンの『マルクスの理論的体系』をテキストにした研究会が河上の研究室で開かれていたことを述べている。

- 32) 学年度が従来の9月から翌年6月までを今日のように4月から翌年3月までに変更される過渡的な時期であり、この学年は短縮されて、試験が2月と3月に行なわれた。
- 33) 河上の経済学史の開講は、本稿で明らかなように、(Ⅰ)1910—11年、(Ⅱ)1911—12年、(Ⅲ)1912—13年、(Ⅳ)1915年3—6月、(Ⅴ)1915—16年(Ⅵ)1917—18年、(Ⅶ)1918—19年、経済学部となってから田島と隔年交替で、(Ⅷ)1920—21年、(Ⅸ)1922年度、(Ⅹ)1924年度、(Ⅺ)1926年度であった。河上文庫にほぼ完全に残っている『ノート』は(Ⅰ)、(Ⅲ)、(Ⅳ)、(Ⅹ)、(Ⅺ)であり、断片的であるが残っているのは(Ⅸ)である。もう一冊残っている『経済学史 大正15—16年』は、紙ばさみの背文字が「大正13—14年」を訂正したものであり、内容が「第2部社会主義の経済学」である。中に「ここ数頁大正八—九年度原論講義にとる」と記録され、表題より相当古いものである。とくに目次のみを書かれた箇所は第1部個人主義の経済学の一部を含んでいる。杉原四郎教授の研究(『河上肇経済学史講義』の「解説」)によると堀経夫氏が受講されたノートの目次構成に類似している。しかし堀氏は「大正8年9月—同9年7月」の受講としておられるが、京大経済学部教務掛の保管資料では堀氏の受講は(Ⅶ)の大正7年9月—同8年6月である。以上のことから、この「大正15—16年」の『ノート』は(Ⅶ)の一部に相当する。なお(Ⅷ)は『近世経済思想史論』、(Ⅸ)は『資本主義経済学の史的発展』に講義内容が相当する。
- 34) 『成績表』によれば、この学年末に試験が行なわれ、河上教授の経済原論第1部の採点表がある。この学年の原論第1部の講義は田島が担当しているので、河上は講義せず、前年度の落第生の試験のみを行なったとも考えられる。
- 35) この講演については、全く筆者の推定である。注31)にふれた河上文庫の「こんにゃく版」の『共產党宣言』のドイツ文テキストは紙ばさみに保存され、第1ページ目にノート1枚がはさみ込まれている。ここに河上は次のように書いている。「マルクスに就ては、研究すべき方面が沢山にある。しかし今日私が述べやうと思ふことは、その中で、マルクスの理想とせし社会状態如何といふ問題だけである。この問題については、私は今まで余り述べたことが無い。只一昨年東京の帝国教育会の講演で、講演のシステムの上から全く之を避ける訳に行かぬので、多少其れに触れて置いたけれども、しかし当時は学会の席上でなかったので、本当のことは言はずに、伏せて置いた部分が少くない。そのことは、講演速記を公にする際、序文にも断って置いた所である。しからば何故当時露骨に話をしなかったか、また其の

後とても、何故この問題について物を書かぬか、と言へば、所謂安寧秩序を紊乱する慮があるからである。しかるに今日は、大学内に於ける学会の講演であるから、斯様な心配をする必要もないと思って、講演のくちに当たった機会を利用し、外の場合では到底述べ難い、又著書や雑誌にも書き難い、と思う問題を、題目として選んだ訳である。」と、文中「東京の帝国教育会」は1919年8月のことであり、この講演は1921年に相当し、「大学内に於ける学会」は当時経済学部内で組織されていた経済学会に相当する。経済学会大会（年1回）の第1〜2回および第4回の記事が『経済論叢』に掲載されているが、丁度1921年第3回大会に相当する記事掲載がない。内容の上、記事として載せられないという点が推定理由である。なお、京大庶務課『学報』（大正10年5月28日）にも開催通知のみである。

- 36) この学年の経済原論講義は、「講述者の校閲を経ず」として京都経済学研究会（P）より2分冊で刊行された。
- 37) スミス記念会について、当時の新聞（大阪朝日新聞 1923年6月8日）は次のように報じている。「京大のスミス記念講演会には、経済学部諸教授が壇上に顔を並べて其の造詣を吐露するという以外に、社会主義、非社会主義と学説を異にする両派の教授がスミスを如何に観て居るかが聴衆の興味を殊にそそったので、さしにも広き大講堂も溢れるばかりに詰めかけた」と、つづけて河上について「マルキシストの頭目たる河上博士が例の能弁でスミスの著作を紹介するに止め、何等マルクスに話は触れずに終った」と。その頃同じ新聞に「学界と人物 京大経済学部」が連載（6月1—13日）され、河上について、次のような記事が書かれている。「田島博士と経済原論及び経済学史を分担しているのが河上肇博士で、そして、古い田島と新しい河上を併せ有すこと京大の誇であると共に、日本の帝国大学教授に河上博士のような学者を見るのは正に奇蹟の部類に属する」と書きだし、当時の河上を「博士の学に対する真摯な態度は推服の他ない。無我死時代に最高潮に達した人道主義は、時の経つに連れ次第に影を潜め、代りに純粹のマルキシスト姿が、刻一刻色濃くなって来た、これも、真面目に考え、幾多思想上の苦肉を体験してからのことである。實際運動のある頭目は、博士を『抜きがたき人道主義の病』と診断した。併し、もう『病』は『抜』けきった、『大阪朝日』に連載し、後『社会問題管見』改版中に収めた『或医者の独語』や、大正十年四月の『改造』に掲載して同誌の発売禁止を招いた『断片』を見れば、博士の傾向那邊に向っているかが解ろう。斯くして博士は、心の底に湧き立つ熱情を、理智の力でわずかに押え、飽くまでも冷静な眼で、唯物史観の教えるところを、極めようといふのであろう。博士は学の人である、博士を懲慥して象牙の塔から出すことは、何人にも困難である。併しながら、千に一つそういう時代が来たら、博士の街頭に叫び日が来たら、あの真面目な、執念深い、そうして負れない気性が、實際運動の上にどんな結果をもたらすか、それ

は予言の問題だ」と記されている。

- 38) 『経済論叢』アダム・スミス生誕二百年記念号(第18巻第1号, 1924年1月)には、河上は「スミスの所謂「真実の価格」について」を書いているが、当日講演したものは、記事として要旨が第17巻第1号に掲載されている。
- 39) この年6月末まで河上は、病気のため和歌山で療養する。そのため学史講義は9月から開講されている。原論は講義ノートに日付が明記されていないが、同じ頃に開講されたと思われる。
- 40) 『経済原論・全 大正14年度京大講義』として大阪の佐藤繁(?)から刊行された。
- 41) 「吾々の敬愛する河上先生を中心にしてマルクスの大著『資本論』の研究を始めた」と『会報』は書き、つづいて「4月29日以来、回を重ねること6回に及んでいる。出席者約五十、河上先生から『資本論』を読むに就ての態度、マルクスの研究方法、其他先生の過去の御経験等に就て屢々有益なお話を承ることが出来た」と記し、5月27日には櫛田民蔵をむかえ、「資本論劈頭の文句とマルクスの価値法則」の講義をうけている。なおこの研究会の第1回目の河上講義が「読書余録」として『新聞』第5号に掲載されている。
- 42) 経済学部教授有志の「意見書」は、全文ではないが、『新聞』第30号に掲載されている。河上文庫には「意見書(仮りに決定)大正14年12月 神戸正雄, 河上肇, 河田嗣郎, 本庄栄治郎」のざら紙5枚謄写刷のものが残っている。
- 43) 『経済学大綱』に載せた「河上肇年譜(記憶に基づく自記)」には、「1月『学生事件』のため家宅搜索を受く。これより以後、内外事端漸くしげし。」と記している。『新聞』によれば、「河上博士の書齋より押収したもの」としてマルクスの *Wage, Labour and Capital*, *Lohnarbeit und Kapital*, *Engels Grundsätze der Kommunismus*, *Lenin Imperialismus*, 社会科学研究会会員の書簡数通等が記されている。
- 44) 『社会問題研究』第69回の「労働の生産力の発展と資本蓄積との衝突—ローザ・ルクセンブルグの『資本の蓄積』について」が当日に「試みんとした講演—それは都合により中止したもの—の手控をそのまま公にしたものである。」(第70冊参照)
- 45) 経済学史は、1973年に杉原四郎校訂によって、『河上肇経済学史講義』(大月書店)として公表された。経済演習は河上文庫に「経済演習答案」として河上に提出された論文数点が残っている。
- 46) 社会科学研究会の指導教授になることについては、『自叙伝』の「思ひ出・断片の部—荒木寅三郎の頭」に記されている。「京大学生事件」ののち、京大社会科学研究会は全国組織の「学連」から脱退すること、指導教授をえて、純粋に学術研究団体となることを条件として、この年の3月頃から再組織された。4月下旬には講

演会が開かれているので、遅くとも4月の初旬には、河上は指導教授を引受けたと思われる。

- 47) この日のことと講演の要旨が「一学究の公けの日誌」(『我等』第8巻第6号)として公表されている。
- 48) 1926年12月11日の櫛田民蔵宛の手紙には「昨日『経済学批判会』の発会式に代わり第1回講演会を催しました。これは言わば、若干の学生と共に私も発起人の一人として立てた京大内の私共の会です」(大内兵衛・大島清編『河上肇より櫛田民蔵への手紙』181ページ)と書いている。なお『新聞』第45号には会の規約が載っている。
- 49) 『新聞』には週研究会に「河上肇博士の研究発表あり」と書かれているが内容の記述がない。河上文庫に「Das Kapital und Deutsche Ideologie 1926/1927」と書かれた小型ノートがあり、これによって、河上が経済学批判会でドイツ・イデオロギーの講読をしていたのではないかと推定される。
- 50) 『経済学大綱』(改造社経済学全集第1巻)として1928年10月に刊行。『ノート』として残っているのは、紙ばさみ背文字に「原論 最終講義」と記し、全7冊あり、いずれも断片的なものである。
- 51) 河上の土方批判は『社会問題研究』第86冊(1928年7月)に「マルクスの絶対地代論へ土方教授の『地代論より見たるマルクス価値論の崩壊』と題する論文の分析」が公表されただけである。この土方論文は1928年9月に『経済学論集』に載ったものであり、ここで取り上げられたのは1927年7月刊行の『経済研究』(第4巻第3号)に載った土方の「マルクス価値論を排撃す」であると思われる。
- 52) 『新聞』によれば、謝恩会の席上「河上博士辞職反対学生大会実行委員会」の声明書が読みあげられたと報じ、その全文が掲載されている。
- 追補：1915(大正4)年11月6日東大京大法学部聯合学生演説会において講演「何の為に経済学を修むる」(要旨とも『会誌』第14号)